

本研究の主な成果を次の4点にまとめる

研究1) 大学のユニバーサル・デザインを基盤とした遠隔教育の理論研究

障害学習支援の研究は幾多あるが、オンライン学習における障害者支援については、十分な研究が行われていない。ただ、近年次の2点の事業および調査研究が行われている。その一つは、文部科学省「社会で活躍する障害学生支援プラットフォーム形成事業」(2017-2019)であり、東京大学と京都大学が障害のある学生のためのプラットフォーム事業を三年間にわたって行っている。また、全国の大学485校から回答を得た日本学生支援機構の「障害のある学生の修学支援に関する実態調査」(2021)は、ポータルサイトによる支援とオンライン授業に関する支援について、全国の動向を把握している。その結果では、視覚障害のある学生の場合は、授業資料の拡大や点訳、テキストデータ化のほか、リアルタイムでの映像資料の説明などが行なわれている。聴覚障害学生の中には、オンライン授業の動画音声は聞き取りにくいという学生も少なくない。そのため、動画を含む教材の文字起こし、字幕付けのほか、音声認識ソフトやノートテイク、手話通訳者による遠隔情報保障が多くの大学等で行なわれるなどの工夫がみられた。

研究2) LMSやICTを活用したUDLの大学及びNPOの事例研究

UDLを実践している大学事例としては、早稲田大学、宮城教育大学、筑波大学の事例を分析した。特に、筑波大学におけるピア・チューター養成講座では、「障害学生支援技術」を履修できること、また、この養成講座終了後にピア・チューターとしての15時間以上の支援活動に従事したものや障害学生支援チーム・スタッフとして30時間以上の支援活動に従事したものには活動証明書が発行されるなど、本学においても参考にできる事例となっている。

研究3) ユニバーサル・デザインおよびUDLについての学生の意識調査

UDLに配慮したオンライン学習の問題点についての意識調査の結果は、次表のようになっている。

オンライン学習で困った点(N=160)	%
教員から出される課題が多い	77.4%
一緒に学んでいる人と話す機会が少ない	63.5%
通信環境が不十分である	44.7%
自宅では集中できない	36.5%
時間の配分など学習のペースがつかみにくい	28.3%
パソコンやスマホの操作に不慣れである	24.5%
一人では学習を継続しにくい	23.3%
画面の文字が読めないなど教材がわかりにくい	22.6%
zoom等のシステムが複雑	13.8%
パソコンがないなど学習環境が整っていない	10.1%
その他	3.10%

一般学生でさえ、操作の不慣れや一人での学習継続性の困難、教材のわかりにくさ、システムの複雑性が学習の障害となっている。

研究4) LMSにおける方法とプログラムの改善・開発

オンライン学習におけるUDL教材の作成のためには、視覚障害、聴覚障害など障害の種類に応じた教材の開発とプログラムの改善が必要となってくる。たとえば、視覚障害学生のためのUDL教材の作成にあたっては、スライドのポイントを34ポイント以上に、一頁の行数はできるだけ少なめに。動画はできるだけ避ける、事前資料を配付することで、学生が自分のパソコンやiPadで拡大して確認できるようにするなどの工夫ができる。また、聴覚障害学生のためには、ZOOMではchatを活用する。画面では顔を撮して口が見えるようにする、さらに、家庭の支援者の補助をお願いする、学習支援サポーターによるノートテイクを図るなどの開発を行っていく必要がある。

このような障害学生の学習支援ハンドブックを講師のための教材として今後開発することが求められる。